

中規模都市における生涯スポーツの振興

—下関市民のスポーツに関する意識・活動調査から—

安 富 俊 雄

本研究は平成3年1月に下関市教育委員会・下関市スポーツ意識調査委員会で実施した下関市民のスポーツに関する意識・活動調査をもとに、総理府の全国調査⁶⁾と比較しながら中規模都市（下関市）における生涯スポーツ振興方策の一端をさぐろうとするものである。

本来、スポーツの振興には仲間、時間、場所、指導者、プログラム、情報といった要素が考えられるが、ここでは下関市の意識調査から本市の現況を把握・分析し、新たな層のスポーツ振興につらなるように筆者の担当したスポーツ行事などのプログラムやスポーツ情報といったソフト面を中心に論を進めてゆきたい。

なお、下関市の調査に関しては下関市スポーツ意識調査研究班『下関市スポーツ振興総合計画のための調査報告書』（1991年）を参照されたい。¹⁾

この調査は下関市の20歳以上の成人男女を対象に選挙人名簿から2000人を地区別、年齢別、男女別に等間隔に抽出した。有効回収数1286人（64%）。ここでいう中規模都市とは、行政区分では人口13～43万人規模をさしており、それを基準とした。したがって下関市は人口26万人都市であり、中規模都市に該当する。

下関市の概要とスポーツ

1) 下関市の概要

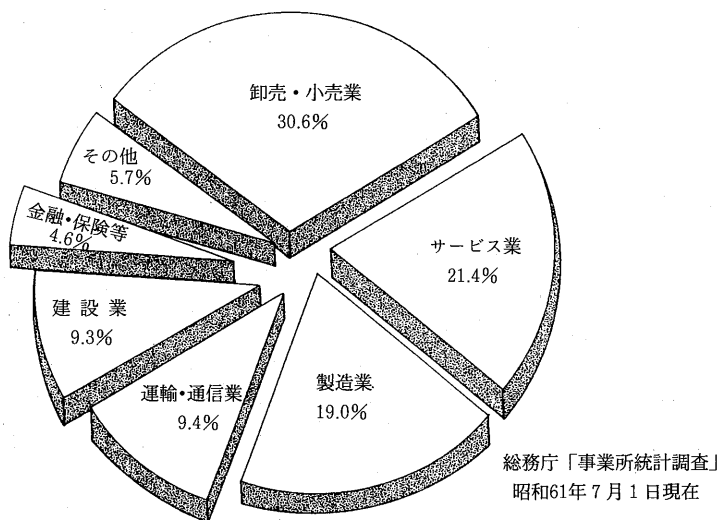
本市は本州の最西端に位置し、南は関門海峡、東は周防灘、西は響灘と三方を海に囲まれた中規模都市である。古来、九州や大陸への玄関口として海陸交通の要衝として重要な位置を占めてきた。港は市のシンボルであり、日韓航路は我が国最初の国際フェリーであった。

地形は丘陵が多く平野部は乏しい。港町一般に見られる地形である。

人口は平成4年12月現在262,314人であるが微減傾向にある。うち65歳以上の高齢者人口は14%を越えており、いわば高齢者都市といったところである。人口密度は1174人、一世帯あたり2.8人と小教家族である。現在では子どもの数が1.53人と核家族化がすすむ中で本市でも一段と小教家族化傾向を示している。

産業に目をてんざると、本市は、高度経済成長期までは水産都市として全国に名をとどろかせていたが、200カイリ以後水産業の不振も重なり現在は低迷している。しかしフクの水揚げは現在でも全国の九割を占めている。

図1 産業別従業者数



産業構造は図1のように卸売・小売業、サービス業、製造業、運輸・通信業、建設業、の順に大別される。つまり下関市は商業都市であることがわかる。

2) スポーツ

本市のスポーツの統括は市体育協会によってなされている。現在、各種目団体に加入し活動している人の数は11,457人で、その割合は全国平均に比べ

非常に少ない。しかし地域のスポーツ環境に目を転ずると、他の市町村にくらべ決して見劣りするものではない。図2のように公共施設は各地域に整備

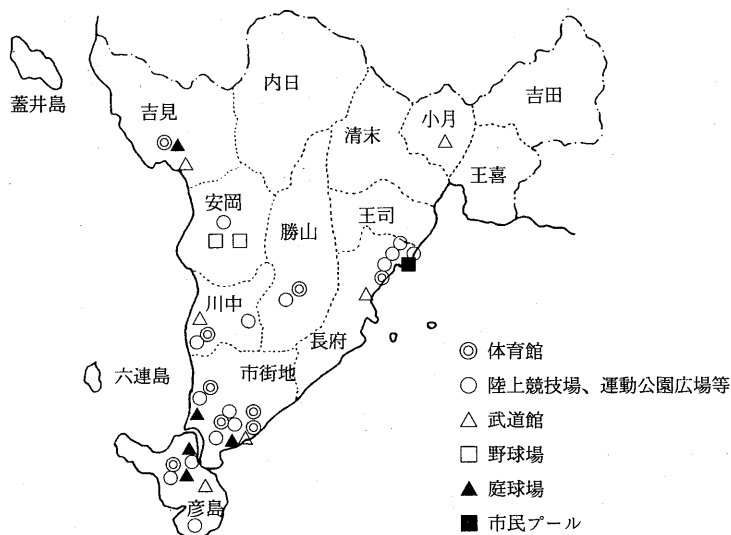


図2 公共体育（スポーツ）施設設置状況

されているし、小・中学校における開放率は100%と日常生活圏におけるスポーツ活動の場は確保されている。つまり本市ではハード面よりも指導体制などを含めたソフト面についてのプログラムづくりやサービス面を今後検討する必要があるようだ。

現代——ゆとり社会の到来

今日では経済的な豊かさを背景に国民の大多数が中流意識をもつまでに飛躍的に成長した。同時にこれまでの物質的豊かさから精神的豊かさに価値がおかれるようになり、その一端として今日では生活の質が問われるようになった。そして豊かさの中味すなわち“ゆとり”がクローズアップされている。それへの第一歩として国のゆとり作戦は国際社会で問題にされている労働時間の削減に力を注ぎ、公務員の週休2日制を昨年より実施している。民

間レベルでは、現在、全国の企業のうち週休2日制の実施率は50%余りと⁴⁾ほぼ半数を数えているが、国民の大多数が中流意識をもつ割には他の先進国と比べ労働時間が長いことがわかる。したがってこれに今年から始まった学校の週休2日制が加われば、国レベルで週休2日制への定着へ向けて大きく前進することになる。さすれば国民のこれまでの生活パターンが大きく転換されることは想像にかたくない。すなわち、これまでの1日休養型レジャーから、1日積極型レジャー+1日休養への移行は目にみえている。これこそ中味のある“ゆとり”実現の第一歩といえよう。

さて今回調査した下関市の状況を見ると、完全週休2日制をとる企業が14%と全国平均よりかなり下回っていることがわかる。⁴⁾ この数字が物語るように下関市民の生活はまだまだ全国的にみて“ゆとり”時間が少ないといえよう。このことがスポーツ活動にも大きな影響を与えているように思われる。ちなみに、労働基準監督署によれば、企業の週休2日制の普及率は、東京78.5%、大阪78.2%、広島61.6%、山口57.1%（昭和63年調べ、ただし山口は平成元年）と大都市とは大きな格差がある。⁴⁾ これでは、経済的問題もさることながら自由時間の使い方についても同様に大都市圏と比較して大きな影響を与えていることは必至と思われる。ところが先の調査では市民の75%は生活に“ゆとり”を感じている。以上のような現況をふまえつつ下関市のスポーツ振興について考えてみたい。

1、下関市の調査分析から

①クラブやサークル加入者

現在、下関市でクラブやサークルに加入して定期的にスポーツ活動をおこなっている人は市民の18%と全国平均（17.5%）よりやや多い。これを性別にみると、男性21.5%、女性15%と男性の方が活動の割合が高い。全国調査でも同様で男性22.4%、女性13.4%と男性の方がほぼ一割程度高い実施率を示している。つまり定期的にスポーツ活動をしている人は男性で2割、女性で1割程度であることがわかる。これを年齢的にみると、2、30歳代でピークを迎えた後、徐々に減少し、60歳代から漸次増加するといったゆるいS字カーブを描いている。このように現在の地域生涯スポーツ活動はおよそ子育てを終えた30歳代を中心として、さらに70歳代の高齢者たちによって展開されていることがわかる。しかしながらこのうち女性においては30、40歳代を

中規模都市における生涯スポーツの振興

中心におこなわれていたが、今日では30歳代がパートタイマーのターゲットとされ、教育費やローン返済のためにパートにかりたてられて一時のようなスポーツ人口の増加にかげりがみられる。

②活動形態

つぎにスポーツ活動者の活動形態をみると、表1のように自分らでつくった同好会が最も多く、つづいて町内会等近所の人びとのサークル、職場のク

表1 クラブ・サークルの加入状況

(%)

該当者数	加入状況			1 の 場 合											2・3の場合				
	1 現在している	2 以前していた	3 したことがない	該当者数	クラブ・サークルについて							今後について				該当者数	入りたくない	入りたい	D・K
					職場のクラブ	学校のOB	町内会等のサークル	スポーツ施設のクラブ	自らでつくった同好会	その他	D・K	続けた	やめた	D・K					
総数	951	18.0	19.6	62.5	171	18.7	2.9	25.2	12.3	32.8	3.5	4.7	93.0	2.3	4.7	780	56.0	21.4	22.6
男性	447	21.5	20.6	57.9	96	22.9	5.2	21.9	6.3	34.3	5.2	4.2	93.8	2.1	4.2	351	57.8	21.1	21.1
女性	492	15.0	18.7	66.3	74	13.5	0	29.7	20.3	31.1	0	5.4	91.9	2.7	5.4	418	55.0	21.8	23.2

総数は、性別不詳を含む

クラブの順になっている。性別では、男性では職場のクラブが多く、女性では、町内のサークルやスポーツ施設のクラブが多いことがわかる。これらはいずれも男女の社会的立場を表わしているものと思われる。つまり男性にとっては職場の社交的関係であり、女性は近所の仲間といった関係であろう。

なお特筆すべき点として、今日では活動の拠点が地域の公共スポーツ施設から都市部の会員制の民間スポーツ施設に変わろうとしていることである。全国調査からも明らかなように、スポーツ活動者の15%が会員制のスポーツクラブに所属し、うち女性が男性の2倍の割合を示している。なかでもOLなど若い層が多い。こうした傾向は地域のドロドロした関係や面倒な全員協力型のクラブよりも気楽で好きな時にプレイでき、しかも整備されたしゃれた施設であることを望む現代若者気質の表われと思われる。今後一層このような傾向は強まるものと思われる。幸か不幸か本市では民間スポーツ施設が

とぼしい現状では、若者のニーズには応えていない気もする。このような傾向は経済的な面からみると決して誰でも気軽にスポーツとはいえないように思われるが、施設のあり方については本市でも今後参考にする必要があるようだ。

また本市の特色として、クラブ・サークル加入者が今後もスポーツ活動を継続したいと考えているのに対し、加入したことがない人の中には今後とも加入したくないと考える人が半数以上をしめ、する人とならない人がはっきり分かれているように思われる。

③活動種目

では次に、それら加入者の活動種目をみると、表2のように本市ではソフトボール、インディアカ、トリムバレーボール、野球、バドミントン、歩け歩け運動、ゴルフ、バレーボール、テニスの順に多く、ニュースポーツや社交スポーツの種目が主におこなわれていることがわかる。

表2 クラブ・同好会でやっている運動・スポーツの種目(上位5種目)

		1 位	2 位	3 位	4 位	5 位
全 国 調 査	昭和 54年7月調査	野 球 (26.7)	ソフトボール (18.2)	バレーボール (16.3)	テニ ス (11.0)	ゴ ル フ (10.2)
	57年10月調査	ソフトボール (20.1)	野 球 (19.7)	バレーボール (18.3)	ゴ ル フ (12.7)	テニ ス (10.4)
	60年10月調査	ソフトボール (23.3)	バレーボール (14.9)	野 球 (14.6)	テニ ス (14.1)	ゴ ル フ (10.9)
	今 回 調 査 〔 性 〕	ソフトボール (17.1)	ゴ ル フ (14.9)	野 球 (14.4)	バレーボール (13.4)	テニ ス (11.5)
	男 性	ソフトボール (25.5)	野 球 (24.3)	ゴ ル フ (22.2)	ゲートボール (9.6)	テニ ス (8.4)
	女 性	バレーボール (24.6)	テニ ス (15.8)	フォークダンス ゲートボール	(10.5) "	体 操 (9.9)
下 関 市	全 体	ソフトボール (12.7)	インディアカ (11.5)	トリムバレーボール (9.1)	野 球 (7.9)	バドミントン (6.7)
	男 性	ソフトボール (22.0)	野 球 (14.3)	ゴ ル フ (7.7)	ゲートボール (5.5)	テニス、トリムバレー インディアカ、射撃(44)
	女 性	インディアカ (20.5)	トリムバレーボール (15.1)	バドミントン (12.3)	水 泳 (9.6)	バレーボール (6.8)

性別では、男性はソフトボール、野球といった球技種目、それにゴルフなどが多く、女性ではインディアカ、トリムボールといったニュースポーツ、

中規模都市における生涯スポーツの振興

それにバドミントン、水泳、バレーボールといった種目がおこなわれている。全国的にはソフトボール、ゴルフ、野球、バレーボール、テニスの順で、男性はソフトボール、野球、ゴルフ、ゲートボール、テニスの順、女性ではバレーボール、テニス、フォークダンス、ゲートボール、体操の順になっている。これらはいずれも従来より男女それぞれに人気のあるスポーツといえよう。これを本市と比較すると、男性では全国とはほぼ同じ傾向を示しているが、女性では全国的には競技スポーツの傾向が強いのに対し、本市ではニュースポーツの傾向が強いことがわかる。これはニュースポーツの普及に力をそいできた本市行政の努力の結果であろう。

これまで定期的にスポーツ活動をおこなっている人たちの意識や現況を中心にみてきた。

次に不特定多数の人に対するスポーツ振興の立場から現在市や地区でおこなわれているスポーツ行事について考えてみたい。

④未加入者の参加希望種目

では未加入者が今後参加希望する種目をみると、テニス、水泳、バドミントン、卓球、ハイキングなど現在比較の人気のある種目を望んでいる。性別では男性はテニスやソフトボール、女性ではテニス、バドミントン、水泳とこれまた女性に人気のある種目があがっている。また全国調査でもほぼ同様

表3 地域スポーツ行事への参加

(%)

		参 加 し た	ときどき参加した	参加しなかった
下 関 市	総 数	15.3	4.9	79.9
	男 性	15.8	4.5	79.7
	女 性	14.8	5.3	79.8
	20 歳 代	10.0	5.0	85.0
	30 歳 代	22.1	6.1	71.8
	40 歳 代	19.2	6.4	74.3
	50 歳 代	8.1	2.5	89.4
	60 歳 代	11.0	2.9	86.0
	70歳代以上	15.5	3.4	81.0
全 国 調 査	総 数	24.9	見物しただけ11.2	63.9
	男 性	25.2	” 8.4	66.3
	女 性	24.6	” 13.5	61.9
	中 都 市	20.7	” 7.7	81.6

な傾向を示している。

一般に行政やスポーツ団体は地域住民の健康や親ぶくそしてスポーツ活動の動機づけとしてスポーツ大会を年中行事のように開催する。しかしながら主催者側の意図が受け手（住民）側に十分に伝わらず空まわりすることがしばしばある。したがって徒労に終わらないためには主催者側が住民のニーズを正しく把握することが肝要になる。

⑤地域スポーツ行事への参加

まず市民の地域スポーツ行事の参加状況を見ると、表3のように参加した人、ときどき参加した人を含めると20.2%と全国調査の中都市レベルの20.2%と同じ割合を示している。

これを性別にみると、本市では男女ともに参加の割合はほぼ同じ値を示している。これは全国的にもほぼ同率である。

年代別では、30歳代の参加率がいちばん高く、続いて40歳代、70歳代、20歳代、60歳代となる。ここからも地域の活動が30、40歳代を中心に営まれ、その後しばらく遠ざかり70歳代になってまた活発になっていくことがわかる。つまり、定期的に活動する人と行事へ参加（不定期）する人との年代層はほぼ軌を一にしている。目につくのは、全国調査との比較からも明らかなように20歳代の参加は本市では余りにも少ないことがわかる。これは若者を本市に迎い入れる環境が整っていないことがあげられる。つまり、魅力のある職場もさることながら、若者を魅了するような施設やプログラムが用意されていないのが現状である。しかしながら、一方では若者らは地域との関わりを拒んでいるのも確かである。若者が定着するには地域に生活基盤が定着し、子ども会や学校など地域での関わりが深まることによって増大することを物語っている。すなわち結婚までの20歳代はほとんど地域の関わりは少なく、結婚することによって住環境が定着し地域との関わりが強まっていくものと思われる。

しかしながら参加率が低調な要因には行事内容やピーアール不足も考えられ、主催者側の市民のニーズに対する的確な把握が必要である。

⑥参加したいスポーツ行事

では市民はどのような行事を望んでいるのか。市民のニーズによると、表4のように体力づくり関係、運動会・球技大会、野外活動、競技スポーツの順になっている。全国調査でも体力テスト・体力づくり関係のものが最もニ-

中規模都市における生涯スポーツの振興

表4 参加したいスポーツ行事

(%)

		競技スポーツ	運 動 会 球 技 大 会	野 外 活 動	体 力 づ くり	参加したくない
下 関 市	総 数	5.5	24.3	22.4	29.1	18.6
	男 性	7.7	26.1	21.0	28.7	16.5
	女 性	3.5	22.9	24.2	28.9	20.5
	20歳代	10.7	28.4	23.1	19.5	18.3
	30歳代	6.9	27.5	27.5	24.6	13.4
	40歳代	5.0	25.6	21.9	32.6	15.0
	50歳代	3.7	22.6	17.7	39.0	17.1
	60歳代	1.4	15.1	23.3	32.2	28.1
	70歳代	2.5	17.5	7.5	25.0	47.5
全 国 調 査	総 数	13.5	28.8	20.8	23.8	39.2
	男 性	18.8	26.8	17.1	25.6	39.1
	女 性	9.0	30.5	22.5	22.4	39.3

全国調査は複数回答で下関市の調査の概当項目に集約した

ズが高く、続いてレク行事、野外活動、競技会的行事と本市とほぼ同じ傾向を示している。これまでスポーツ行事といえば、競技スポーツのイメージが強いが、今日ではそれへのニーズはきわめて低いことに注目したい。

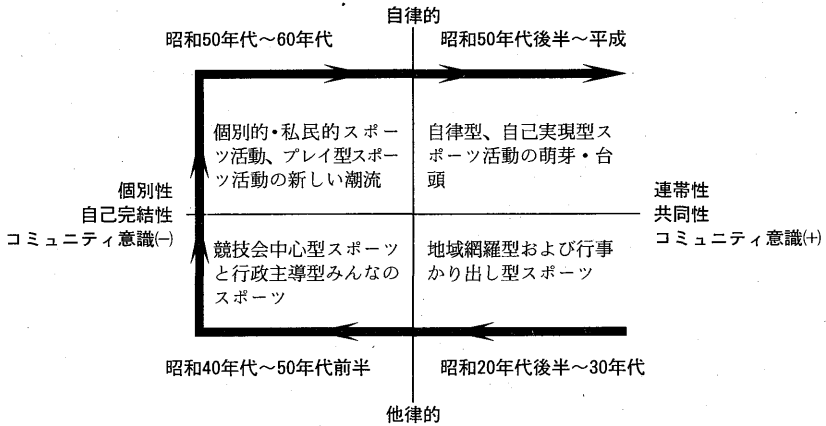
これを性別でみると、本市も全国調査もほぼ同じ傾向を示すが、強いていえば、男性の方が女性よりも競技スポーツを志向していることがいえる。それはスポーツが男性文化として今日まで至っている証でもあろう。それを証明できるのは年齢別からも明らかである。すなわち20歳代の体力的に充実した時期では競技志向が他の年代にくらべて強いことがわかる。そして加齢とともに健康を念頭においた体力づくり志向が強まっていくことがわかる。したがって、スポーツ行事を開催する場合、以上のようなデータに基づいたニーズと年齢に適した行事内容を企画することが今後必要となってこよう。特にこれからは体力づくりやレク関係、それに野外活動についての行事がまたれるところである。

II 生涯スポーツの振興策

これまで本市を中心にスポーツ活動の現状をみてきたが、全国調査とのデータ比較からも明らかのように本市も今後スポーツ先進地を目標として鋭意努力する必要がある。

地域スポーツの歴史を図に表わすならば図3のようになる。つまり1950年

図3 地域スポーツのタイプとその変遷²⁾ (多々納1985を改変)



代後半から地域行事の一環としておこなわれるようになった。当初は地域ぐるみのレクリエーションとしてのスポーツ大会型行事が多かった。それが1970年になると、地域住民のコミュニケーションを目的とした社会教育のような行政主導型の地域スポーツが盛んになる。それを組織・集団活動中心と考えるならば、1980年代は個人的活動が盛んになり、いわゆる生活に根づいたスポーツ活動がおこなわれるようになった。そして今日にいたっては自己実現を求めて多種多様なスポーツの関わりがされるようになり、自主・自律的な活動が盛んになってきた。

1) 自由時間の増大

今日では、スポーツの振興は文化（福祉）レベルを表わす指標の1つと考えてよかろう。つまりスポーツ先進地といわれる多くの地域では都市づくりの一環として文化環境の中にスポーツが位置づけられている。運動公園やその中の体育館をはじめ運動施設を人びとの集まりやすい場所や緑地の多い所など、身心をいやしてくれる地域への建設はまさにそれを示している。また今日問題視される高齢化社会や生涯教育に関してはスポーツがいずれも大きな意味と価値を持っていることは明らかである。特に地方の都市は高齢化が深刻な問題であり、高齢者の豊かな生活を確保するためにもスポーツや運動は不可欠であろう。

表5は20年間の各層の自由時間の推移を表わしたものであるが、⁵⁾ 表から

中規模都市における生涯スポーツの振興

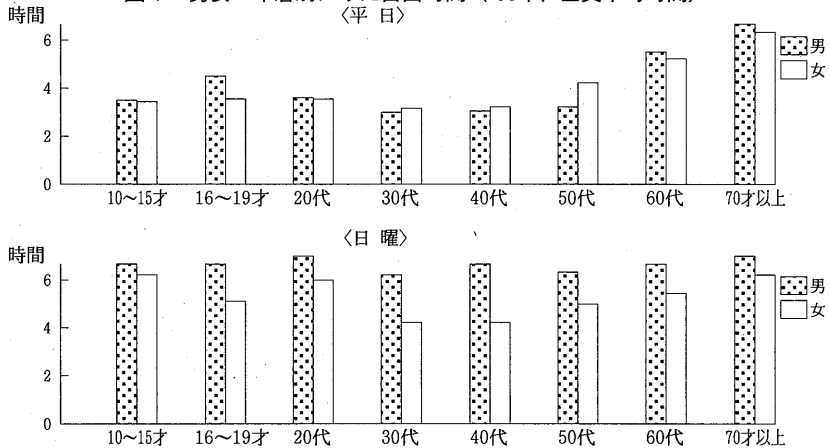
も明らかのように徐々に自由時間の増大をみる事ができる。そして近年の週休2日制の促進は今後さらなる自由時間の増大を生むことは明らかであり、それによってスポーツへのニーズが高まることは明白である。こうした社会

表5 層別にみた自由時間の変化(全員平均時間)

	平 日					土 曜					日 曜					
	'70年	'75	'80	'85	'90	'70年	'75	'80	'85	'90	'70年	'75	'80	'85	'90	
国民全体	3.36	3.52	3.51	3.51	4.07	4.08	4.41	4.36	4.39	5.08	5.49	6.13	6.05	6.08	6.22	
男	10~15才	3.22	3.42	3.52	3.31	3.38	5.05	5.32	5.18	5.33	5.24	7.27	8.01	7.35	7.32	7.26
	16~19才	4.05	4.15	4.04	3.54	4.19	4.43	5.38	5.13	5.10	5.49	6.58	7.26	7.03	6.49	7.20
	20代	3.50	4.27	3.53	3.54	3.58	4.43	5.40	5.06	5.07	5.29	7.07	8.17	7.20	7.39	7.42
	30代	3.21	3.51	3.28	3.17	3.14	4.00	5.17	4.36	4.21	5.02	6.52	7.26	6.51	6.52	6.52
	40代	3.30	3.45	3.36	3.17	3.24	4.09	4.44	4.40	4.24	5.11	6.10	7.02	6.56	6.55	7.19
	50代	3.52	4.05	3.58	3.47	3.43	3.56	4.54	4.52	4.53	5.16	5.59	6.46	7.02	6.47	6.57
	60代	4.38	5.36	5.33	5.41	5.38	4.47	5.28	5.54	5.59	6.19	6.28	6.50	7.22	7.08	7.33
70才以上	6.38	6.31	7.01	7.22	7.33	5.51	6.33	7.38	7.33	7.35	6.55	7.30	8.13	8.03	7.57	
女	10~15才	2.57	3.06	3.14	3.11	3.19	4.38	4.24	4.41	4.49	4.48	6.38	6.28	6.35	6.35	6.28
	16~19才	2.58	3.18	3.27	3.25	3.37	4.17	4.33	4.24	4.44	4.55	5.32	5.56	5.42	5.44	5.47
	20代	3.27	3.36	3.30	3.36	3.44	3.58	4.12	4.12	4.19	5.06	5.09	5.09	5.06	5.21	6.07
	30代	3.06	3.09	3.16	3.15	3.36	3.12	3.30	3.40	3.37	4.07	4.15	4.27	4.22	4.31	4.46
	40代	3.00	3.06	3.16	3.24	3.42	3.07	3.34	3.28	3.31	4.12	4.25	4.22	4.23	4.16	4.49
	50代	3.32	3.41	3.44	3.52	4.11	3.28	3.49	3.50	4.07	4.19	4.36	4.29	4.48	4.51	5.00
	60代	4.24	4.20	4.55	4.54	5.16	4.26	4.51	4.56	4.54	5.15	5.06	5.14	5.38	5.37	5.44
70才以上	5.29	6.10	6.18	6.17	6.42	5.38	6.45	6.27	6.03	6.33	5.39	6.51	6.45	6.40	6.52	
農林漁業者	3.22	3.40	3.57	3.41	4.14	3.12	4.04	4.06	3.38	4.15	4.02	4.27	4.53	3.54	4.41	
自営業者	3.03	3.15	3.09	3.12	3.29	3.15	3.21	3.14	3.13	3.46	5.11	5.30	5.14	5.18	5.43	
男の勤め人	3.39	3.58	3.35	3.25	3.26	4.27	5.20	4.54	4.46	5.23	7.13	7.44	7.18	7.23	7.25	
女の勤め人	2.43	2.56	2.47	2.40	3.08	3.13	3.49	3.30	3.32	4.12	4.48	5.16	4.52	4.52	5.15	
家庭婦人	3.58	4.02	4.14	4.33	5.15	4.12	4.13	4.24	4.37	5.16	5.06	4.40	4.50	5.04	5.23	

NHK世論調査部編「図説日本人の生活時間1990」より⁸⁾

図4 男女・年層別にみた自由時間('90年、全員平均時間)



NHK世論調査部編「図説日本人の生活時間1990」より

表6 下関市の週休2日制の形態別実施状況

状況をふまえながら行政は市民が健康で文化的生活を営むための義務を担っている。しかしながら行政側の環境づくりはもちろんであるが、ソフト面では民間の教育・スポーツ・文化団体等の協力なしには成就するのは不可能である。

表6は本市の週休2日制の施行状況であるが、全国的には都市部を中心に週休2日制が制度化されている所が多いが、本市では半分程度とま

完全週休2日制	14.0%
月3回週休2日制	3.1%
隔週週休2日制	9.4%
月2回週休2日制	12.2%
月1回週休2日制	15.8%
その他	15.1%
週休1日制	30.5%

労働基準監督下関署調べ

だまだ今後の努力目標といった状況である。⁴⁾ 今後週休2日制が促進されることは必須であるが、現状におけるスポーツ活動と照らし合わせてみると、本市では低調な要因には自由時間の問題が第一に挙げられるように思える。前述したように、休養1日、レジャー1日といった週休2日制が定着すれば、スポーツ活動も飛躍的に活発化するだろう。さらに今後はそれらを通じて単にスポーツとかレジャーのある生活というより、自己の生き方を変えていくような自由時間の増大であってほしい。

2) 生涯スポーツの推進

つぎに、生涯スポーツの推進は単にスポーツの振興ではなく人びとのライフサイクルに合ったスポーツのあり方が問題になってくる。我々がスポーツを想起するとき、これまでは一般的には競技スポーツをさしてきた。したがって地域社会で開催されるスポーツ行事といえば、およそ競技スポーツ大会が相場であったし、プレイするものも自ずと青少年が中心であった。そして、地域のため、学校のため、企業のために勝つことを最大の目標と考えていた。しかしながら生涯スポーツとなれば、対象も青少年から高齢者層に及ぶ幅広い層を対象としなければならない。したがってスポーツの内容もその取り組み方も一様ではなく従来のそれとは異なってくる。特に施設面では、“いつでも、だれでも利用できる身近な施設”が重視されるようになってくる。さらに、それに合わせてこれら施設のインストラクターや情報の提供などハード、ソフト両面にわたり細心の心くばりが肝要になってくる。生涯スポーツを本当に生きたものにしていくにはソフト面の充実が大切である。ソフト面

がいきとどいたときこそ本来の文化都市といえよう。

3) 本市のスポーツ振興策

表7は本市のスポーツ振興に対する市民の印象であるが、スポーツ振興が

表7 スポーツ振興について

		(%)				
	該当者数	非常に 進んでいる	かなり 進んでいる	わからない	やや 遅れている	非常に 遅れている
総 数	898	0.3	9.9	69.3	13.5	7.0
男 性	424	0.5	13.2	60.1	17.2	9.0
女 性	467	0.2	6.9	77.5	10.1	5.4

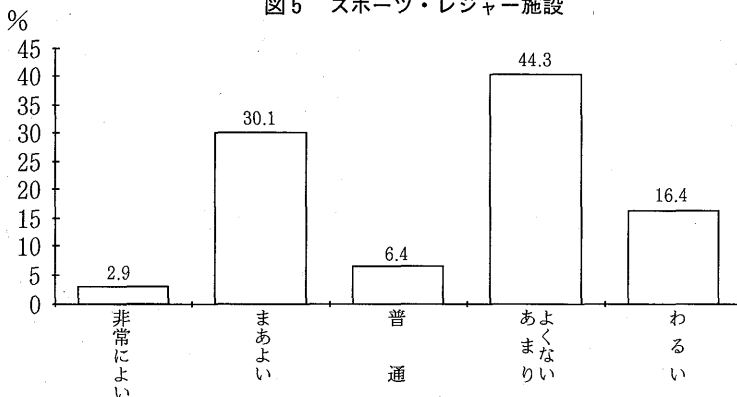
総数は、性別不詳を含む。

進んでいると思う人が10%、これと反対に遅れていると思っている人が20%と遅れていると思っている人が多い。ただ多くの人がわからない(70%)と答え、しかも女性の割合が多いことはどのように解釈すればよいか。強いていえば、あまり不自由を感じていないものと思われる。つまり適当に施設を利用できるとかスポーツをしていない人が多いためであろう。

では本市のスポーツ振興に今後どのような点が必要なのか調査結果をみると、図5のように手軽な公共施設、スポーツ行事・教室、室内温水プール、野外施設、大型の公共施設の順になっている。

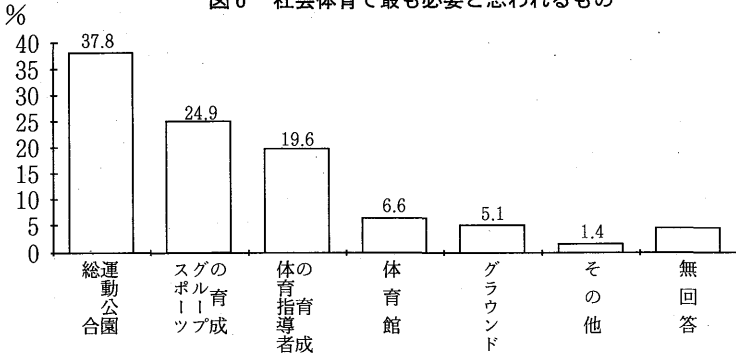
以上の結果からも明らかなように市民は手軽な施設の整備・拡充やプログ

図5 スポーツ・レジャー施設



新広域市町村圏計画策定に関する住民意識調査 (1990)

図6 社会体育で最も必要と思われるもの



ラムを望んでいることがわかる。また本市の別の調査でも図5のようにスポーツ・レジャー施設が十分でないと思っている人が6割強いる。³⁾ この調査からも今後は高齢化社会にふさわしく身近で手軽に使用できる施設が重要になってくることを強調しておきたい。

さらに施設もさることながら本市にとって重要なのは図6のようにスポーツ振興における指導体制やどのようなクラブ育成をするのか、またそのためにどのような動機づけをするのかといった行事内容やプログラム施設のネットワーク化、スポーツ情報のネットワーク化についての施策検討であろう。よい意味ではスポーツクラブやグループ活動は活動者自身にまかされ、活動者の主体性が尊重されている。しかし逆に考えれば、調査結果にも見られるように、住民はグループ育成を希望しているにもかかわらず、スポーツクラブ育成の事業や既存のクラブの質に対する助言についてはほとんど実施されていないのが現状である。換言すれば、既存のスポーツクラブをどのように育て発展させるのか、またそれら発展したクラブの連合化をどのようにはかっていくかなどの展望がとぼしいように思われる。穿った見方をすれば、現在はもうクラブ育成の時期ではないかもしれない。しかし生涯スポーツ時代を迎える今日では、地域のスポーツ愛好者ができるかぎり長続きするスポーツをプレーの面でも考え方の面でも習得することが大切に思えてならない。スポーツに対する考え方が多様になったとはいえ、まだまだ勝敗にこう泥する人が多く、クラブ運営が長続きせず、レギュラーだけのクラブが数多く存在する。これでは本当の意味での豊かなスポーツは営めないといっても過言ではない。この点の克服なくして生涯スポーツの展望はない。またスポーツは

若者の特権ではなく、老若男女が共有できる生活文化である。こうした理念に基づいた地域スポーツの振興が望まれるのではなからうか。前にも述べたように世は正に質の時代である。スポーツが市民の生活をより豊かにするような視点の立ったスポーツ振興施策を望みたいものだ。

厨は地域スポーツ振興の基本的な考え方として、①ヨコに結び合う人間関係を創造する活動としてのスポーツ ②自発的活動と身銭を切る活動 ③共乐的スポーツから共育的スポーツへ ④地域に根ざす、健康で豊かな継続的活動をあげている。²⁾ このような理念にしたがって生涯スポーツとしての行事や教室の開催、さらにはスポーツクラブの育成が重要である。

階層的にみて気になるのは女性層のスポーツである。今日では女性の時代がいわれ、女性の社会的進出が著しいがスポーツにおいても例外ではなく、競技スポーツをはじめ地域スポーツにも女性の進出が目立ってきた。しかしながら対男性と比較してみると、その割合はいまだ少数であることがわかる。こうした傾向は本市においても同様である。その要因には伝統的家庭観やスポーツが男性文化であることなどが考えられる。したがって職場進出の有職婦人層にとってはスポーツは無縁といったデータがある程である。その意味では女性の社会的進出が盛んになればなるほど男性の理解が必要になってくる。換言すれば、残念ながら女性の生涯スポーツは男性の理解あってのスポーツである。それが現実である。

本文中でも述べたが本市においては、自由時間の一層の増大を望みたい。週休1日の企業がまだ30%もあり、逆に完全週休2日制となると1割台である。この現実を重視したい。昨年より公務員関係の週休2日制が実施されているが、今後さらに連動して一般企業の完全週休2日体制への早期実現を望みたい。1日レジャー、1日休養の構図が画けるととき一層生涯スポーツは推進されるものと確信する。

最後に、地域スポーツ振興には行政の役割が大きいことを強調しておきたい。特に地方ではその役割は大きい。行政の姿勢によって市町村のスポーツ振興が左右されるといっても過言ではない。

スポーツは今後市民が生活を営む上での大きな意味と価値をもつものと確信する。その意味では施設などのスポーツ環境づくりやスポーツ行事などソフト面のプログラム化など都市政策の一環としての位置づけが必要になってくる。本市では特にそれが求められている。合わせてスポーツ行政は住民へ

のサービス行政である。スポーツの振興は心のかようサービス行政（スポーツ行政）であることを望みたい。

参考・引用文献

- 1) 下関市スポーツ意識調査研究班「下関市スポーツ振興総合計画のための調査報告書」下関市教育委員会 1992
- 2) 厨義弘他編『地域スポーツの創造と展開』大修館書店 P25～27 1990
- 3) 下関地区広域行政事務組合「下関地区広域市町村圏住民意識調査」下関市 1990
- 4) 山口地方労働時間問題「中小企業に週休2日制を」山口労働基準監督署 懇談会 1990
- 5) NHK世論調査部編『図説日本人の生活時間1990』日本放送出版協会 P199 1992
- 6) 総理府「体力・スポーツに関する世論調査」1989